

ほーほーどり

我孫子野鳥を守る会

No. 249

2016年

3～4月号

別冊 < 台湾探鳥会実施報告 & 感想 >

台湾探鳥会実施報告 (2016年1月11日～16日)

< はじめに >

台湾探鳥会は、当会と長年の交流がある「台湾野鳥保育協会」前会長の林さんのご厚意の下で、2011年から有志探鳥会として4回行われています。第5回目となる今回は、当会の公式行事として2016年1月11日から16日まで5泊6日で開催され、15名の皆さんが参加しました。

探鳥ツアーの主な行程は、初日：桃園空港（入国）烏來桶後溪 礁溪泊 2日目：礁溪・四十甲 下埔竹安 古亭 蘭陽溪口（清水大閘）花蓮泊 3日目：布洛灣 天祥 西寶 碧綠 關原 梨山泊 4日目：福壽山 天池 合歡山（小風口・武嶺）奥萬大泊 5日目：奥萬大 埔里 霧峰桐林 台北泊 6日目：台北植物園 華江雁鴨自然公園 桃園空港（出国） というものです。

台湾島は、南北が約394km、東西が約144kmと縦長で南北に細長い形状で、島の東部と中央は山地で、3,000mを超える高峰が連なる山脈が南北に走っています。面積は約36,000平方kmで日本の九州と同程度の大きさです。

この台湾島の北西（桃園）から北東（礁溪）に出て、北東から東側を南下して中部（花蓮）へ、東側中部から東西横貫道路を通過して中央

山脈を越えて台中市へ、台中から北上して台北へ戻るという、恐らく移動距離は500kmを優に超え、相当広い範囲で湿地から高山まで多彩な環境を巡る探鳥ツアーでした。特に3～4日目は、平地から3,000m級の山地を越えるルートで、道中で降雪によるチェーン規制箇所があり、車をバスから小型車に乗換えるというハプニングもありました。

台湾の気候は、北部は亜熱帯、南部は熱帯モンスーン地帯になりますが、海拔の変化が大きいため、温帯や寒帯などの気候環境も形成しており、生物の種類が多い豊かな生態系を有しています。また、長い期間、島として隔離されていたことにより、台湾には25種の固有種と56種の固有亜種の鳥が生息し、記録されている野鳥は約650種になります。

今回のツアー全体で認められた鳥は111種（うち固有種は14種）で、私個人としては、2度目の台湾探鳥でしたが、初見の鳥が28種にものぼりました。

以下に6日間のツアーの前半は桑森、後半は鈴木が担当し、報告します。

< 認めた鳥 >

末尾のリストの通りで、111種でした。

<参加者>

大久保陸夫、桑森亮、古出洋子、古賀嗣朗、古賀道子、相良直己、鈴木幸子、鈴木静治、鈴木裕嗣、多葉田五男、野口隆也、平岡考、弘實さと子、松本勝英、間野吉幸（50音順）計15名

<第1日目 1月11日（月）>

成田線の始発電車で湖北駅から5時45分に乗り、7時頃には成田空港に着き、予定通り9時30分に成田空港を発ち、桃園空港に現地時間で12時40分に到着。入国手続き等を終えて13時30分頃に林さんご夫妻の出迎えを受け、バスに乗り、ツアーが始まった。今回の探鳥ガイドは林さんご夫妻で、林さんから6日間で観察する鳥の数100種をターゲットが示され、全員の意気が高揚し、いよいよ鳥見の雰囲気盛り上がった。ツアーコンダクター兼通訳は黄さんという方で、若い頃は自民党の青年交流事業に携わり、日本の九州に研修滞在したこともあり、現在は大学の非常勤講師をしているとの自己紹介だった。

空港でバスに乗り、乗車する時から小雨が降っており、林さんの話では、この1週間の天気予報は雨模様とのこと。季節的にも雨が多い時期で、これまでの台湾探鳥会で雨が一度もなかったのが幸運だったらしく、今回に雨が纏まるような、意気高揚はすれど先は思いやられるスタートとなった。

桃園空港から台北市の南部を東に進み、2時間程で最初の探鳥地「烏來（ウーライ）」に着く。烏來は台湾原住民族のタイヤル族の言葉で温泉を意味し、平均海拔1000mの山地にある南勢溪（河川名）の渓谷沿いに温泉街があり、日本の塩原や鬼怒川温泉のような景観だ。バスの中から渓谷を眺めながら山中

を進むと川面にカワガラスがいるとの声上がる。街の駐車場でバスを降りると外は小雨で、私は傘をトランクに入れたまま、ずぶ濡れの探鳥になってしまった。

バスを降りて街中を抜けると南勢溪から分岐した桶後溪沿いに溪流の鳥を探す。まずは林さんがカワビタキを見つけ、レーザーポインターで居場所を示し教えてくれる。道路から10m程下の川岸を覗き見ると石の間をカワビタキが飛び跳ねている。黒っぽい地味な色だが、は飛び跳ねると赤茶色の上下尾筒が美しい。私は初見の種で、この溪流沿いで何度かカワビタキを見ることのできた。

この最初のポイントで喉から胸全体が黄色のセキレイを見つけたが、直ぐに上流に飛んでしまった。ツメナガセキレイだと直感的に思ったが、一瞬で確認できず残念。溪流ではキセキレイ、ゴイサギなどが、山の木々の中にはメジロが観察できた。上流へ歩いて、来た道に戻る途中で遠くの樹幹に黒い鳥がいて、ヒメオウチュウと教わる。オウチュウとの違いは大きさのほか見た目では分らないが、生息環境が異なり、山地ではヒメオウチュウとのことで、勿論初見の鳥だ。

駐車場所に戻る街中の上空にはヒメアマツバメが飛び交うのが見られ、久しぶりに御茶ノ水で良く聞いたチリリチリリの鳴き声も聞いた。（御茶ノ水の某高層ビルの換気口でヒメアマツバメが繁殖しており、繁殖期には飛翔が観察できる。）雨中での探鳥だったが、ここでは10種が観察できた。

この後、バスは渓谷沿いに逆戻りし、途中から東方面へ宿泊地の「礁溪（チャオシー）」に向かう。2時間ほどで礁溪に入ると雨はあがっており、夕食場所の蘭陽礁溪總店に到着して、当店の名物料理「甕窯雞」を食す。大

きな籠の中に甕が入っていて、金籠に入れた鶏を籠の甕に出し入れして丸焼きにし、これをぶつ切りにして食べる。ツアコンの黄さんは日本の焼き鳥と紹介していたが、鶏を焼くのは同じだが、まるで違う食べ物だ。

初日の宿泊先は、礁溪温泉の「中冠礁溪大飯店」という観光ホテルで、ロビーには「台湾探鳥協会」の歓迎案内表示があり、この先ずっと同じ団体名だった。ここはスパ付きホテルだったが、水着で入る台湾式の温泉は使わず、シャワーのみにした。同室の大久保さんと明日の天気のリクエストを願って早やめに就寝。

< 第2日目 1月12日(火) >

前日に7時から朝食、7時30分にロビー集合、出発との行程を示され、当日は早朝6時に起床し、そそくさと朝食を済ませ、定刻までにロビーへ。早い人は早朝にホテル近くを歩き、カノコバトを見たとの声も聞こえる。ロビーでは、黄さんが用意した「台湾探鳥協会」の横断幕を開き、全員で記念撮影し、その後、バスに乗り込み探鳥に出発。天気は曇り空だが雨はなく一安心。

当初計画にあった「礁溪公園」はパスして**礁溪・四十甲**へ向かい、小さな集落の寺院にバスを止め、集落を歩き探鳥。歩きはじめると、早速電線に台湾オナガが止まり、遠くの木の前にはアカハラ 2羽を確認。道路沿いの電線や木立にはシロガシラ、インドハッカ、ベニバトが何度か現われ、オウチュウもあちこちで観察できる。暫くすると、劉さん(林さん夫人)が*ヤマムスメを見つけ、数羽が家並に消えた。まずは台湾の代表的固有種で人気のあるヤマムスメを見られて、皆から笑みがこぼれる。日本でお馴染みのシロハラやジョウビタキなどを見つつ、集落の突

き当りから戻る途中でもヤマムスメが 6羽現われ、順光で美しい姿を堪能できた。近くの民家で餌(食べ残しのご飯)を置いていたようで、それを台湾オナガと一緒に食べていたようだった。

集落を一巡りの後は家並の裏手にある湿地帯へと足を伸ばし、水田にはバンやタカブシギを観察し、水路にはキセキレイ、湿地の草の中にはハウチワドリらしき小鳥が動くが、種までは同定できない。民家裏の畑地でハウチワドリが間近に見られ、何人かが写真撮影し、アオハウチワドリかマミハウチワドリか意見が分かれたが、マミの方で落ち着いた。

バスに戻り次の探鳥先に向かう途中、周辺の湿地や農地を巡りながらバスの中からサギやシギ類を観察する。種の同定は難しいが、タカブシギやイソシギが中心のようだ。この地区は広大な湿地であったが、エビの養殖地として開発され、その後、エビの病気で養殖地が放棄され、野鳥の生息環境が改善されてきているらしい。

次は**下埔竹安**に行き、水路のある場所(砂港橋)にバスを止め、探鳥ポイントへ。水路沿いに歩くと広い沼があり、ここではカモ類などの水鳥が沢山いた。ゴイサギの大群が上空を旋回飛行し、日本ではこんなに多くのゴイサギはお目にかかれない。圧巻はセイタカシギの大群の乱舞で、群れが水面で休んでいると思うと、一斉に飛び立ち、上空を旋回飛行する、真に乱舞するといった光景だ。水面に降りたセイタカシギを数えると700~800羽はいたのではないだろうか。ここでは、日本で夏鳥のヨシゴイも見られ、マミハウチワドリも葦の中から姿を現し、写真撮影に成功した大久保さんも満足気だった。

バスに戻ると、水路の水面上を数十羽のツ

バメが飛翔し、コンクリート堤壁のそれぞれの排水穴に出入りしている。燕尾がなく褐色味がありショウドウツバメのようだが、胸のT字帯がない台湾ショウドウツバメだった。

宜蘭のレストランで昼食を採り、当地特産のキンカンを食べたが、甘くて美味しかった。台湾の柑橘類は概して酸味が薄く甘みが強いと感じた。朝食のバイキングにはいつもオレンジのような甘い柑橘果実が置いてあった。

午後の探鳥先は古亭という地区で、水路沿いの農耕地だった。水路の土手を歩くと、電線にオウチュウが止まり、チョウゲンボウが飛んだ。水路の上をセキレイが飛び、鳴き声からセグロセキレイかと思ったが、台湾にはこの種はいないはず。双眼鏡を覗くとツメナガセキレイだ。この地の水路や隣接の水田にはツメナガセキレイが多く見られ、セキレイは全てツメナガだった。また、水田ではクサシギ、ムナグロ、タカブシギが、アマサギ、コサギ、チュウサギの群れが観察できた。

この後は蘭陽溪口（清水大閘）に行ったが、鳥はいなくてトイレ休憩のみとなった。これでこの日の探鳥を終え、認めた鳥の数は50種にのぼった。

宜蘭からは一路南下し、宿泊地の「花蓮（ホアリエン）」へ向かい、移動距離は100km位で約3時間を要し、夕食会場の休閒養生館には19時頃に到着。食事は養生野菜と豚肉を使った薬膳風のしゃぶしゃぶ鍋がメインで、初めて口にする香味野菜が多かった。

この夜の宿泊は「煙波大飯店」という快適なホテルで、到着が20時30分と遅くなったが、移動途中のコンビニで調達した前回探鳥時に金門島で飲んだ懐かしの金門高粱酒38度を煽って就寝。

< 第3日目 1月13日（水） >

当日は6時前に起床し、6時30分から朝食。出発は7時30分で少し余裕があった。予定通りホテルを出発し、この日の朝も雨はなく、何とか天気は持ちそうだった。

この日の最初の目的地は太魯閣（タロコ）の布洛灣（ブルウワン）。太魯閣国家公園は花蓮から台中まで中央山岳地帯を横断する東西横貫道路の東側山岳地帯にあたり、面積は9,200haと広大で、地形は高くそびえ、半分以上が2,000m以上の山地で占めている。太魯閣渓谷は台湾を代表する景勝地で、渓谷沿いの道路を走ると、立霧溪が千万年にわたって削り、地殻の隆起と風化浸食により形成された断崖絶壁の大理石の峡谷が眼下にあり、その深さ100m以上はあると感じた。

探鳥地の布洛灣は、原住民族のタロコ族の言葉で“こだま”を意味すると言われ、四方を山で囲まれた河岸段丘にある。布洛灣に入ると広場の中に太魯閣国家公園管理所があり、管理所前の駐車場でバスを降り、霧雨の中で探鳥スタート。緑地の木道から歩きはじめ、最初の木立がある緑地で小鳥が動き始める。*台湾シジウカラの群れが動き回り、黄色の胸に尖った黒い頭の姿が見え隠れする。キバラシジウカラも混じっている。*ミミジロチメドリもかなりの数がいる。アオチメドリと*クロガシラは見逃したが、セグロコゲラに台湾ジュズカケバトなど、殆んど初見の鳥だ。草の上にはシロハラ、ビンズイ、とするとどこからか赤い鳥と黄色い鳥が飛んできた。ベニサンショウクイのだ。夢中でカメラのシャッターを切っているうちに時間が過ぎる。

十分堪能した後、移動を始めると立木の中に*ゴシキドリが見え、管理所の屋根にはり

ユウキュウツバメが赤い額を見せている。近くの茂みからモズの声が出て、探すとシマアカモズ(アカモズ亜種)が見つかった。園内を歩いていると地元のカメラマンに混じり大久保さんがカメラを構えている。寄って行くと、なんとヒメフクロウがいて、貴重な鳥を地元の方々のお蔭で見せていただいた。

布洛灣で多めに時間をとって雨も収まり、次は天祥の青年活動センターへ。11時30分には到着。昼食まで少し時間があるので入口横のウッドデッキでコーヒーを飲んで休憩。コーヒーをすすりながら空を見上げていると、上空に大きなカザノワシが突然現われ、雄大な飛翔を見せてくれた。あわててバスにカメラを取りに行く人もいたが、コーヒータイムでも常に観察・撮影用具を携行することが必要だと改めて気づかされる。この天祥では、山裾の廃小屋に*ルリチョウが現われたが、私は見つけることができず、前の台湾探鳥でもルリチョウを2度見逃しており、3度目にも失敗してしまった。(後に奥萬大でじっくり観察ができた。)

昼食後は、横貫道路を高山地帯に上がっていき、道中の西賣では*カンムリチメドリの小群と樹枝に止まるカンムリワシを間近に見て、碧緑の神木がある休憩所「餐飲小樓」では桃蜂蜜入りコーヒーを飲みながら色鮮やかなズアカエナガを観察。關原では、ズアカエナガ、カンムリチメドリ、キバラシジュウカラを混群で観察、そしてここでもカザノワシが飛んでくれた。これでこの日の探鳥を終え、認めた鳥の数は34種となった。

關原を16時20分に終え、梨山へ向かう。山間の断崖絶壁上の道路は崩れかかった工事の箇所があり、狭い道路を恐る恐る通過し、6時30分頃には宿泊地の梨山に到着。

梨山は山岳地帯にある高原のような地域

で集落や農地が散在しており、烏龍茶が特産らしく、茶畑が多くあった。この夜の宿泊と食事場所は、梨山賓館というかつて蒋介石の迎賓館として建設された格調の高い施設だった。賓館に着くと、バスに女性が出迎えてくれて、中国語で施設の説明が始まった。意味が解らず怪訝な顔をしていると、我々の日本語を聞いて日本人と解ったようで、突然流暢な日本語で話し出した。実は彼女は日本人で、聞けば太田さんという北海道出身の方だった。我々の団体名称が台湾探鳥協会であったため、台湾人と思ったようだ。

夕食の後は施設内の蒋介石ゆかりの展示館と、8時から原住民族タイヤル族の民族歌謡ショーを見学した。タイヤル族の若者達が民族衣装を身に纏い、プロジェクターによる映像と民族歌謡と民族楽器である口笛琴の演奏を披露した。歌は日本のフォークソングのような印象で、原住民族文化の一面を楽しんだ。

ショーの後は前夜と同じく高粱酒を飲みながら写真を確認して、明日はいよいよ高山の鳥を見ることになるかと期待に胸を膨らませ床に就いた。

<参考：台湾原住民について>

台湾原住民は台湾の先住民族の呼称で、彼ら自身が台湾に昔から住んでいたという意味で「原住民」と呼ぶ。2008年の人口は約49万人で、台湾総人口の2.1%を占める。政府認定は16民族あり、アミ族、タイヤル族、パイワン族が多数を占める。平地原住民と山地原住民に大別され、日清戦争後の日本の台湾領有・統治時代は山地原住民を高砂族と改称されていた。

(以上、桑森亮が報告)

< 第 4 日目 1 月 14 日 (木) >

朝食を摂るため宿舎の食堂に行こうと廊下を歩いていくとベランダ(標高約 2,000m)から雪を頂上に頂き朝日に輝く 3,886m の雪山が見える。台湾で一番高い山は玉山(3,952m)、二番目がこの雪山(3,886m)で、日本の富士山(3,776m)より高い。雪山はほぼ富士山級の山である。早速ベランダに出る。今日は昨日と違って天気良さそう。ベランダの屋根の隙間を見るとイワツバメが巢に入っているのを見つける。さすがに南国の台湾では早くも繁殖時期かと思う。

7 時からの朝食後、バスに乗り 8 時には標高約 2,300m の**福寿山農場**に到着し、ここで 9 時 30 分まで探鳥する。雪の雪山を望み、梅、寒緋桜、黄桜、アカツメクサ、オニゲシの咲く農場では落葉樹の下で楓の実を啄むアトリの群れが、白いカラーの花が咲く鴛鴦湖の周りでは、*アリサンヒタキの、ルリビタキ、*キンバネガビチョウ、*ヤブドリ、*シマドリ等が見られた。

梅に止まるジョウビタキに見送られ 9 時 30 分に蒋介石の別荘の達観亭がある**天池**にバスで向かう。この天池の周りを左右に 3 回ずつ回ると幸せになるといわれていて、池の周りは観光客で賑わっていた。こんな所で探鳥出来るのかなと思ったが、別荘の建物の裏庭に行くとルリビタキ、シロハラが草原と木の間を歩き来している。しかしルリビタキと違う小鳥も見られる。図鑑を取り出し皆で検討の結果、*アリサンヒタキであることが判った。また地面に置かれた松の枯枝の近くで採食する*キンバネガビチョウも見られた。それから*アリサンヒタキの行く先を観察すると、別荘の玄関近くの植え込みの茂みに入ったり、庭の椅子に止まったり、池の石に止まったり、よく観察してくれれば

かりポーズをとってくれ、ミミズを啜ってきて美味そうに啄む様子を見せてくれた。*アリサンヒタキは 同時に見ることは殆どないようだ。ヒタキの仲間は繁殖期を除きもも縄張りを持つためか。バスまで帰り道、道の下の斜面林の松の木にペアで仲良く止まる*キンバネガビチョウが見られた。繁殖時期が来ているようだ。日本なら 4~5 月に相当すると思われた。

11 時頃バスに乗り、福寿山農場の中餐廳で昼食を摂り、売店で林檎を売っていたので値段を見ると、日本の数倍していた。この高山の農場で林檎を栽培しているようだ。日本の八ヶ岳山麓で高原野菜を作るようなものかなと思った。

12 時 30 分、標高約 3,000m の合歡山の**小風口**駐車場に向け出発する。降雪が予想されたため厚着し、しかも雨具も着たためバスの中では暑いので少し薄着になりましたが、小風口駐車場に着くと、あられ状の雪が降りだし、周りの山々も雪化粧していて、バスから降りてトイレ休憩、土産物を見たりしていると、寒くなって来た。ここでチェーン付きのタクシーに乗換えて 3,276m 公道最高点の峠、武嶺を越えるとのこと。小風口駐車場の端の笹と草原に数羽の*キンバネガビチョウが居るといふ。行ってみると皆一心に餌探しで人をあまり気にしていないようだ。そのうちに 30 羽位笹の茂みより出てきて草原が*キンバネガビチョウだらけになった。中には近くまで餌をくれるかと近寄ってくるものまで現れる始末だ。厳しい高山に生息する厳しさを感じた。これほどの数を見たのは初めてで感激した。リスも時々出て来た。観察していると数羽の脚にカラーリング、足環があるのに気づく。カラーリング(水色、橙、赤、黄)の組み合わせ、カラーリングと足環

の位置(上下)が個体により違うことで足環 No. が判らなくても個体識別が出来るようになってきているようだ。少なくとも 7 羽に足環が付けられていることが判る。*キンバネガビチョウは高山の樹林周辺、疎林などの見通しのよい環境に生息し、地面に落ちた草木の実、昆虫を探す台湾固有種のうち最も高い場所に生息する鳥である。日本でいえばライチョウのようで保護のため足環が付けられているのだろう。

この後、参加者の 1 人がこのパーキングに約 20 分取り残されるというハプニングが発生。トイレに行っている間に他の人が集まった段階でガイドの黄さんが、バスよりチェーン付き乗換タクシーに荷物を積み替えるため、1 人が居ないことを承知の上で運転手に移動の指示をしたもので、後で黄さんがバスに乗り迎えに行き、到着したが、言葉も通じない台湾、雪の最高地点近くで、携帯電話も通じない所で残された驚きはいかばかりか。このことは、言葉とは別に対処方法の日本と台湾の違いがあると思われた。

ともあれ 3 台のチェーン付タクシーで公道の最高点 3,276m の武嶺の峠に向かう。積雪の武嶺の駐車場でチェーンのついていないバスに乗り換える。武嶺の駐車場で待っている間、景色を眺めると素晴らしい山岳が見え、近くの山はモミのような針葉樹が所々見え、笹で多くが覆われているようだ。標高 2,500m 位までは、松林が見られたがここでは見られない。植生の違いを感じる。駐車場の岩場を見るとなんと*キンバネガビチョウが垂直に切り立つ 10m 位の岩場を飛び跳ねながら登っているのを観察できた。またトイレ近くでイワヒバリを見た人もあり。ここ 3,275m は日本では富士山 3,776m より低い、2 番目の南アルプスの北岳 3,193m、自

動車で行ける乗鞍岳の畳平 2,700m より高い地点である。大変なところまで来たと思う。また、ここでは 1~2 月積雪があるようですが、林さんは初めて雪を見られたようで、ガイドの黄さんは日本で 1 回見たことがあり 2 回目とのこと。この原稿を書いていると新聞に、台湾で 1/23~25 記録的低温が続き、北東部の山間部の自然公園で道路が大雪で封鎖され、多くの観光客が下山できなくなり、台北市近くの新北市の茶畑に積雪の写真も掲載されていた。

バスに乗り標高 1,200m の奥萬大に向かう。標高差 2,000m も下ることになる。日本でいえば北岳から軽井沢まで降りるのに相当する。さすがに気圧差、車の揺れ等で気分が悪くなったり、耳がおかしくなったりしたが、何とか無事 16 時 15 分奥萬大に到着。ここには私は 2、3 回目の台湾探鳥会で訪れているのでおなじみの場所だ。駐車場の周り、溪谷側の大木にヤマゲラ、クロヒヨドリ、キバラシジュウカラ、ゴジュウカラなどが出迎えてくれる。しばし夕暮れのなか探鳥。17 時頃バンガロースタイルの宿舎に入る。18 時夕食、洪香蘭は公共の教育施設のため食堂では酒抜きの夕食となる。部屋に帰るが、部屋には暖房がないのと、お湯の出る時間が限られているので、シャワーは浴びず、翌日の準備をして就寝。

< 第 5 日目 1 月 15 日 (金) >

奥萬大の夜 3 時頃ホーホーという裏山より声がする。フクロウ類の鳴き声だろう。それと同時に犬の鳴き声も聞こえる。6 時に起きて外に出るが、小雨模様で未だ暗い。6 時 30 分頃にやっと明るくなる。それから林の木の茂みでキバラシジュウカラの塙からの飛び立ちを見ていると、広場に咲く寒緋桜に

*カンムリチメドリの群れ、*ミミジロチメドリ、ズアカエナガなどが蜜を吸いに来る。メジロチメドリもいました。運のよい人は*ヤマムスメも見たようです。

7時からの朝食を終え、7時30分から奥萬大で探鳥を再開することにする。小雨にも拘らず小鳥は多い。徐々に雨は少なくなる。枯れ木の枝にクロヒヨドリが数羽止まるのを見てから、駐車場の楠の大木の青葉の中に*ゴシキドリ、*ミミジロチメドリ、クロヒヨドリが出入りしている。どうも楠の木の青い実を啄んでいるようだ。刀状のこの実には樟脳が含まれているので、あまり一度に多く食べないようだ。日本でも餌が少なくなるとメジロ、ヒヨドリ、ムクドリなどが啄む。近くにヌルデに似た木の実にキバラシジュウカラ、メジロが止まっているようだ。また楓の実もなっている。大木の梢でベニサンショウクイを見た人もある。駐車場で見ているとタイワンオナガの群れが現れ、車の周りを飛び交う。日本のオナガ同様群れを好むようだ。地面で餌を探している。この鳥は1,200m以下の疎林に生息するので、ここに現れるのは自然のことか。次に池の周りで見ていると橋桁の下から水辺に低中海抜に生息する*ルリチョウが現れる。雨模様でルリ色がはっきり見えないのは残念であった。暫くするとキセキレイも姿を見せた。また大木の枝に止まるベニバトも見る。

奥萬大での探鳥を終え、10時頃バスで埔里に向かう。11時頃標高400mの埔里(公田溝)の田園地帯に入る。車窓より田起こしし、水溜りのある田でアマサギが200羽程度、インドハッカ、オウチュウが餌探ししている光景に出会う。そろそろ田植えの準備かなと思っていると、水の入った田に稲ならぬ刀状の菖蒲の葉の植物が植えられている

のに気づく。林さんの奥様より「白筍」と教えてもらっていたが、後で調べてみると、埔里地区の特産のマコモダケと判った。茎の部分は水の中に浸って成長する植物のため「水筍」、その身が真っ白、真っ直ぐで柔らかいため「美人の足」と言われ、歯ごたえが良く新鮮で柔らかい口当たりと風味で国民に愛されているようです。この日の昼食を摂った金都饗廳でこの味を楽しむことが出来た。田の周辺では電線に止まるコシアカツバメ、田の上を飛ぶヒメアマツバメ、アマツバメなどを観察し12:30に昼食、土産物を買って13時30分にバスに乗り、霧峰桐林に向かう。

14時30分仏教の寺の駐車場に車を止め、小雨の中、川沿いの道を林さん夫妻の案内で歩く。林の茂みからウグイスの囀りに似ているが小さい声で鳴くコウグイスの囀りを聞く。畑の木の間を飛ぶマルハシ、ヒメマルハシを見る。他方、山の斜面のススキの茂みより木の茂みに飛び立つブルーの色合いの目立つクロエリヒタキを観察する。動きが速くなかなか見えなかった。電線、落葉した木にとまるシロガシラ、キセキレイを見て、バスに戻り15時50分高速道路で約200km先の台北を目指す。途中渋滞にあい台北郊外の熱海大飯店に20時ころ到着。バスに乗り夕食を近くの新上享婚宴會館で食べ21時30分頃宿舎に入る。

< 第6日目 1月16日(土) >

本旅行の最終日。6時30分熱海大飯店の食堂で朝食後、7時30分にバスで市内にある台北植物園に向けて出発。この時は小雨模様。8時から9時30分まで台北植物園で探鳥。今までは2007年は個人的に1月初めにここを訪れているが、会の有志の探鳥会2~4回目(2013~2015年)は2~3月に訪れている。

戦前の1896年より植物が集められ1921年台湾初の植物園となり、戦後改修されさらに充実された100年以上の歴史を持つ植物園であり、8.2haに裸子植物、シダ植物、水生植物、蓮池などが植えられ集めた植物は2,000種を超える。年中無休で開門中は無料で入れるのは嬉しい。2~3月になれば熱帯の木、草の花も多くなり、花の蜜を吸う蝶も多く飛ぶのであるが、今回は1月で小雨模様のため、花も蝶もすくない。入り口近くに葎草蘭の白にややピンクの可愛い花が咲き、極楽鳥花が咲いていたに過ぎない。小雨ながら、入り口から少し歩いた大木の茂みにオオコノハズクの幼鳥2羽が枝に止まっているのを観察した。2013年、2014年も観察されており例年繁殖しているようだ。また少し木道を歩くと、ラッキーにもまたまた林の中を飛ぶ*ヤマムスメの群れが見られたので、それらについて池の方に行くと岸にシキチョウが、中島で草を啄むまた、水草の間を歩くシロハラクイナをすぐ近くで観察できたことは幸いであった。池にはバンが多く泳いでいた。また、池の中島の木に止まるカササギを見ていると、枯枝を折り啜えて飛んで行く。巣作りに使う材料集めと思われる。更に進みズグロミゾゴイがいつも見られる池の方に行くも見つからない。その代りスズメより小さいシマキンパラの群れが木に止まっている。暫くすると木から枯葉の落ちていた地面に降りて木、草の実を啄みだした。これも近くで観察出来た。今回はズグロミゾゴイに会えないかと残念に思っていると、やっと林の下で暗所でズグロミゾゴイの幼鳥に会うことが出来た。更に歩いてゆくと、成鳥にも会うことができた。落葉の下にいるミミズのような虫を啜えたようだ。餌獲りはじっとして急に頸を揺らしてつかまえる。動物園で見る

ハシビロコウ、川でアオサギが餌獲る時の様子が似ているようだ。私は2007年1月個人で台北を訪れたとき以来、2013年2月、2014年2月、2015年3月、そして今回2016年1月ズグロミゾゴイに会うことが出来、嬉しい限りである。帰る直前に木の中程に止まる台湾オオタカを見、飛び立つまで観察出来たのはなんとラッキー。

9時30分頃台北植物園からバスに乗り、**華江雁鴨自然公園**に向かう。9時50分に到着し10時30分まで水鳥を探鳥する。この公園は河川敷に運動場、台湾一周の自転車道が整備され、草地は緑で薄紫のサギゴケ、黄色のウサギギク様の花が少し咲き、この頃になると晴れてきたためキチョウ、モンシロチョウが飛び始める。川岸には満ち潮時に現れるツクシガモを待つバードウォッチャーが多くいた。今は干潮で、干潟が見えている。ここでは長く曲がった嘴を泥の中に入れて餌獲りしているアフリカクロトキの群れを見る。この鳥は1980年代現れた外来種で、クロトキは殆ど見られないとのことだ。干潟ではツメナガセキレイ、イソシギ、コチドリ、タカブシギが、水のあるところではコガモの群れが、草地ではインドハッカ、ハッカチョウ、アカモズ、カササギなどが見られた。

10時30分にここを去り、バスに乗り11時30分頃空港に近い城市商旅で、昼食をバイキングで楽しむ。

食後バスで桃園空港に向かう。途中でトビ、判別不能のタカの飛ぶのを見る。13時頃空港に着き、搭乗手続きを済ませた後、林さん夫妻の見送りを受けた後、出国手続きに入る。出国手続きは相当混んでいて長蛇の行列が出来ている。並びながら前後の高校生が多かったので聞くと、京都府丹波篠山の高校で修学旅行という。最近は近くで安全で気候も温

暖、親日的な台湾が人気あるのかとを感じる。出国手続きを終え、免税店で各自お好みのお土産を買い現地 16:20 発のチャイナエアラインに乗り、日本時間 20:20 成田到着。入国審査を終え皆無事到着を確認し解散。

今回の探鳥の旅で、林さん夫妻、ガイドの黄さん、バスの運転手さん、更に担当の間野さん、野口さんをはじめ参加者皆さん等関係者が協力し、色々なことを経験した楽しい探鳥三昧の旅でした。また参加された平岡さん(山階鳥研)から、今までに見ていない鳥の種の同定について、色々な角度(場所を変えて)から撮影することが必要で、そうすることにより種を同定する際、決め手となるとの話があり印象に残った。更にその鳥の生息する環境も広角写真で写し、文章も記録出来れば野鳥保護の参考資料のなるのではなかろうか、今回、春以降日本に飛来するサギ類、シギチ、ツバメ、ツバメ類、アマツバメ類に会えました。台湾固有種では、低地で*クロガシラ、*ヤマムスメに、低~中海抜の山地で*ゴシキドリ、*ルリチョウを、中海抜の山地で*シマドリ、*ミミジロチメドリ、*ヤブドリ、*カンムリチメドリ、*タイワンシジュウカラを、中~高山で*アリサンヒタキを、高山で*キンバナガビチョウを観察できました。更にアジアで稀少種とされているズグロミゾゴイに会えました。また印象に残るのは、赤くて綺麗なベニサンショウクイ、黄色の、濃紺の綺麗なクロエリヒタキ、さらに1回目探鳥会以降近くで観察できなかつた皆さん憧れのヤマムスメが近くで何度も観察出来たことです。また、日本から2,000km離れた南の台湾へ探鳥に行くことを夢見て文章を終わりにします。

*台湾固有種

(以上、鈴木静治が報告)

参加者の一言感想(順不同、敬称略)

悪天候でも・・・100点満点!

鈴木裕爾・幸子

台湾探鳥会には、今回で連続3回目になります。鳥との出会いは、天候・時間・運によって大きく左右されますが、いつも確実に見られるのは台北植物園です。広大な敷地には各種の樹木が植えられ、それゆえ年間を通じて沢山の鳥が見られる。

今回も、ヤマムスメを筆頭に15種以上も見られました。いつでも満足できる場所です。観光旅行で台北に行かれたら、ぜひ双眼鏡を持って立ち寄られると良いと思う、お勤めのスポットです。今回は、生憎の悪天候でしたが、100点満点の探鳥会でした。

初参加ながら大満足でした

多葉田五男

今回が初参加でした。是非見てみたいと期待していたヤマムスメ、ゴシキドリ等数多くの台湾特有種の写真をモノにすることが出来て大満足の旅でした。これも周到に準備して頂いた間野さん、ホテル同室の野口さん始め親切にして頂いた参加者全員の皆様並びに現地台湾の方々のお蔭と深く感謝しております。ヤマムスメの標本を見た時、黒い頭巾を被った頭で、光によって群青色や青紫色見えるボディーに白いレースのついたような長い尾羽を広げて飛んでいる姿を想像していました。

ヤマムスメに憧れて

弘實さと子

第1回台湾探鳥会に参加した方から簡単に見られると言われ第2回から参加しました。残念なことに会えず、第3回もだめで

した。第4回でやっとチラッとだけ。今回の第5回ではなんと3日間も出会うことが出来ました。特に奥萬大のロッジでは目の前に2羽のヤマムスメが庇に止まったり降りたり、暫らくの間楽しませてくれました。特に、飛び立つ時の姿は思っていたより大きく優雅でした。とても幸せな一時でした。

目標を大幅に超えた111種！

間野吉幸

私の台湾探鳥旅行は今回で5回目になりました。今回の探鳥会に当たり林さんに探鳥コースの提案を行いました。苦勞してそれに沿った行程を作成して下さいました。その中心になったのは奥様の劉さんでした。しかも事前に下見までされ野鳥の出具合と安全の確保に注力して下さいました。探鳥は目標の100種を超え111種、新しく7種が観察でき、参加者も満足された探鳥会になりました。何時もながら林さんご夫妻の真心溢れる対応に感謝の探鳥会でした。

セイタカシギ壮観の群舞

相良直己

私が探鳥の楽しみを知ったのは、セイタカシギの優雅な姿に魅せられたからです。可憐な清楚なたたずまい、一羽毎に異なる個性的な顔、赤い長い脚・・・そんな私にとって、今回の台湾探鳥旅行で、これまで最高の感動を味わうことができました。100羽を超えるセイタカシギの群れが次から次へと飛来、旋回し、池面に着水します。いつの間にか千羽近い群れで池は埋まってしまいました。

雪とスリルと・・・

大久保陸夫

二日目の行程である宣蘭～花蓮間は二十

数年前「台湾一周の旅」のツアーに家内と一緒に参加し通過した道程で、時の流れで様変わりした上、記憶も定かではありませんが、当時を思い出しながら車中を過ごした。

花蓮～霧峰桐林間は所によっては三千メートル級の山越えで、時折葛折りの険しい山道を進みます。景観は非常に良いのですが、断崖絶壁の深い谷底を眺めながらスリルを味わうという行程で驚きの連続でした。

そうした中、峠の休憩所で私がトイレから駐車場に戻ったところ、乗るはずのバスがないのです。広々とした駐車場には一台の乗用車と2人の中国人がいるのみです。遠い異国の地で、深閑とした山の中、あいにくと雪も降りだし、心細い限りです。そこには取り残されて暗澹たる気持ちでしょんぼりと佇む私の姿がありました。後で分かったことですが、止むを得ない経緯でバスを出発させ、見放されたわけではないことを知り、ホっとした次第です。

さて、台湾探鳥会では様々な鳥との出会いがありました。初見参の中でもベニサンショウクイ・マミハウチワドリ・ヒメフクロウの三種の鳥は特に私のお気に入りです。

台湾探鳥の私的反省

松本勝英

半月板損傷での手術で見送った探鳥会以外、今回で4回参加しました。特に今回は、山岳コースが主な探鳥で楽しみに申込みました。

出発数日前から、歯痛、腹痛、メガネ破損とまるで行くなと云わんばかりの不具合が発生、応急処置でドタキャンはクリアーしようにか間に合わせました。

バス移動は体に堪えました。特に歯痛は時

と場所を選ばず泣きたくなるほどでした。出現の鳥たちに励まされ、癒され、アルコールの助け（内緒）で無事に帰国出来ました。最大の反省は、ヒメフクロウを眼前にしながらカメラのバッテリー切れと重なったことです。

やはり奥萬大の朝は最高

野口隆也

今回の探鳥会、全員の力で 111 種（固有種 14 種）達成。

個人としては証拠写真状態のヤマムスメが何とベニサンショウクイのおまけ付達成。礁溪、太魯閣、そして奥萬大の朝が最高、今回も同室に恵まれ、多葉田さんのアルコールで熟睡。

いつも暖かく献身的にガイドして頂く林さんご夫妻、コーディネートして頂いた張さん、間野さんにドーシャ!!

冠雪の山々、ベニサンショウクイ

素晴らしい!

古賀嗣朗・道子

私達は 3 年連続 3 回「台湾探鳥」に参加させて頂いた。

- 1) ヤマムスメ（固有種）：過去 2 回チラ見であったが、今回 3 ヲ所で舞い止まる姿を見せてくれた。3 ヲ所目は台北植物園で、間近に 3 羽もヒラヒラと舞ってくれ“日本娘”は歓喜の声をあげた。
- 2) ベニサンショウクイ：3 回目に初めて姿を見せてくれた。真赤と真黄の雌雄の群れが枝に来る。素早い動きで直ぐに飛び立つ。群れが一斉に飛び立ち乱舞する様子は素晴らしいの一言。ベテランの N 氏も思わずカメラで撮るのを忘れ見惚れてしまった! と。百聞は一見に如かず。

3) 梨山賓館：3 日目宿泊したホテルは、標高約 2000m にある蒋介石の避暑地だったという。翌朝、歴史的史跡のテラスから見た冠雪の山々と眼下の風景と町並みは、絶景だった。

4) 野鳥：平岡氏（山階鳥研）も同行され、時折野鳥一口メモを披露され、面白く興味深く思った。

雪山山脈の眺望にカザノワシ

古出洋子

2013 年 2 月、参加してから 4 回目である。事前の天気予報では、行程の殆どが雨マークで、少し暗い気持ちでの出発であった。初日の台北はやはり雨で、烏来桶後溪を傘をさしての探鳥。溪谷にキセキレイ、カワビタキが行きつ戻りつしているのを眺める。樹上に尾に特徴のあるヒメオウチュウを認める。（オウチュウより高度の高いところに棲息ということを知りました。）

翌日、礁溪・四十甲というところの民家のある通りを歩いて行くと、ヤマムスメの群れに出会う。「えっこんな所に?」「きれい!」みんな夢中でした。次の下埔竹安では数種のカモがあり、セイタカシギが次々と飛来し、やがてその大群がああ赤い脚を斜めに伸ばし舞い、着水していった。感動!

3 日目の宿は梨山賓館。夕食後蔣公行館に行き、等身大の蔣公像や宋美齡夫人との写真などを見学する。翌朝は素晴らしく晴れ渡り、雪を頂いた雪山を含む雪山山脈の眺望が開かれ、次のリトルスイスと呼ばれる福壽山農場でも同様の眺望で、またもやカザノワシが悠然と飛翔しており、梅やカラーなどの咲く中を探鳥する。この後山脈横断時、雲なども降り他のハプニングなどもあり、探鳥は中止し一気に奥萬大まで下り、日没前の僅かな

時を探鳥する。期待の奥萬大の朝も雨。朝探をあきらめ朝食に向かう途中、目の前の木立にヤマムスメが現れる。朝食後、小雨の中を寒緋桜などに群がる小鳥を追った。埔里での昼食、金都レストランの1階では盛大な結婚式が催されており、入り口にはあらゆる野菜が盛り飾られていて、思わぬ場面を垣間見ることが出来ました。

最終日は台北植物園と以前候補にあった華江雁鴨公園にて探鳥し、かつてないほど早い時間に桃園機場に送られる。(1/16は台湾総統選で、ガイドの皆さんはお忙しい様子でした。)

雨降りが多かったが、4回目にして叶ったヤマムスメ、色鮮やかな赤()と黄()のベニサンショウクイ、セイタカシギの華麗な連舞、細長い翼のカザノワシ(低速飛行が特徴とのことなので、優雅に見えたのでしょうか)、辛抱強く止まっていたカムリワシの背の風に揺らめく羽毛、やはり行って良かった探鳥会でした。

そして今回は特に台湾の人々の素朴な情に触れられた旅でもありました。

台湾探鳥会参加メンバー



2016 年台湾探鳥会で認めた鳥のリスト

科	日本名	中国名	1/11	1/12	1/13	1/14	1/15	1/16
カモ	オカヨシガモ	赤膀鴨						
	ヒドリガモ	赤頸鴨						
	カルガモ	花嘴鴨						
	コガモ	小水鴨						
	キンクロハジロ	鳳頭潛鴨						
キジ	テッケイ	竹雞						
カイツブリ	カイツブリ	小約紉						
ウ	カワウ	鷓鴣						
サギ	ズグロミゾゴイ	黒冠麻鷺						
	ヨシゴイ	黄小鷺						
	ゴイサギ	夜鷺						
	コサギ	小白鷺						
	アマサギ	黄頭鷺						
	チュウサギ	中白鷺						
	アオサギ	蒼鷺						
	ダイサギ	大白鷺						
トキ	アフリカクロトキ	埃及聖鸚						
タカ	ミサゴ	魚鷹						
	カンムリワシ	大冠鷲						
	カザノワシ	林雕						
	オオタカ (台湾オオタカ)	蒼鷹						
	トビ	黒鷹						
ハヤブサ	チョウゲンボウ	紅隼						
クイナ	シロハラクイナ	白腹秧雞						
	バン	紅冠水雞(黒水雞)						
	オオバン	白冠雞(白骨雞)						
セイタカシギ	セイタカシギ	高蹺鶩						
チドリ	ムナグロ	太平洋金斑鶩						
	コチドリ	小環頸鶩						
シギ	イソシギ	磯鶩						
	タカブシギ	鷹斑鶩						
	クサシギ	白腰草鶩						
カモメ	ユリカモメ	紅嘴鷗						
	クロハラアジサシ	黒腹燕鷗						
ハト	カワラバト(ドバト)	野鴿						
	台湾ジュズカケバト	灰林鴿						
	キジバト	金背鳩						
	カノコバト	珠頸斑鳩						
	ベニバト	紅鳩						

科	日本名	中国名	1/11	1/12	1/13	1/14	1/15	1/16
ハト	アオバト	綠鳩						
フクロウ	オオコノハズク	領角疫						
	ヒメフクロウ	鳩紅						
アマツバメ	アマツバメ	叉尾雨燕						
	ヒメアマツバメ	小雨燕						
カワセミ	カワセミ	翠鳥						
キツキ	セグロコゲラ	小啄木						
	ヤマゲラ	綠啄木						
ゴシキドリ	ゴシキドリ	台湾擬啄木						
サンショウクイ	ベニサンショウクイ	灰喉山椒鳥						
モズ	アカモズ	紅尾伯勞						
	モズ	紅頭伯勞						
	タカサゴモズ	棕背伯勞						
オウチュウ	オウチュウ	大卷尾						
	ヒメオウチュウ	小卷尾						
カササギ ビタキ	クロエリヒタキ	黒枕藍鶺鴒						
カラス	ヤマムスメ	台湾藍鶺鴒						
	台湾オナガ	樹鶺鴒						
	カササギ	喜鶺鴒						
	ハシブトガラス	巨嘴鴉						
ツバメ	台湾ショウドウツバメ	棕沙燕						
	イワツバメ	東方毛脚燕						
	ツバメ	家燕						
	リュウキュウツバメ	洋燕						
	コシアカツバメ	赤腰燕						
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ	茶腹 (市鳥)						
カワガラス	カワガラス	河鳥						
ヒヨドリ	クロガシラ	烏頭翁						
	シロガシラ	白頭翁						
	クロヒヨドリ	紅嘴黑鶺鴒						
ウグイス	コシジロムシクイ	棕面鶺鴒						
	台湾コウグイス (コウグイス)	小鶺鴒						
セッカ	マミハウチワドリ (アジアマミハウチワドリ)	褐頭鶺鴒						
アオチメドリ	アオチメドリ	綠畫眉						
メジロ	カンムリチメドリ	冠羽畫眉						
	メジロ	綠繡眼						
チメドリ	ノドフズアカチメドリ (ズアカチメドリ)	山紅頭						
	ヒメマルハシ	小彎嘴						
	マルハシ	大彎嘴						

科	日本名	中国名	1/11	1/12	1/13	1/14	1/15	1/16
チメドリ	メジロチメドリ	繡眼畫眉						
	ヤブドリ	黄胸薺眉						
	シマドリ	紋翼畫眉						
	キンバネガビチョウ	台湾噪眉						
	ミミジロチメドリ	白耳畫眉						
エナガ	ズアカエナガ	紅頭山雀						
シジュウカラ	台湾シジュウカラ	黄山雀						
	ヤマガラ	赤腹山雀						
	キバラシジュウカラ	青背山雀						
	ヒガラ	煤山雀						
ヒタキ	ルリビタキ	藍尾疵						
	アリサンヒタキ	栗背林疵						
	シキチョウ	鵲疵						
	ジョウビタキ	黃尾疵						
	カワビタキ	鉛色水鶇						
	イソヒヨドリ	藍磯鶇						
	ルリチョウ	台湾紫嘯鶇						
ヒタキ (ツグミ)	トラツグミ	虎鶇/白氏虎鶇						
	シロハラ	白腹鶇						
	アカハラ	赤腹鶇						
ムクドリ	ハッカチョウ	八哥						
	ジャワハッカ	白尾八哥						
	インドハッカ	家八哥						
	クビワムクドリ	黑領棕鳥						
ハナドリ	ハナドリ	紅胸啄花						
セキレイ	ハクセキレイ	白鶺鴒						
	キセキレイ	灰鶺鴒						
	ツメナガセキレイ	東方黃鶺鴒						
	ピンズイ	樹紀						
イワヒバリ	イワヒバリ	岩紀						
アトリ	アトリ	花雀						
スズメ	スズメ	麻雀						
カエデチョウ	シマキンバラ	斑文鳥						
	111 種 (うち固有種 14 種)	認めた鳥の 種類数	10	50	34	27	49	39

凡例: 科・和名は五十音順

ゴシック文字は台湾特有種

(出典: 台北市野鳥学会発行(2014年10月)の台湾野鳥手絵図鑑)